

佳作

「迷ったときは立ち止まって……」

新潟県十日町市立中条中学校

2年 岡田 奈那子

「やっぱりやめようかな。」

ある日、将来のことを考えたときにふと思った。私の夢は国連職員だ。この夢をもったきっかけは、小学校6年生のときにテレビで目にした貧困に苦しむ人々の姿だった。小学生の私には衝撃的だった。不衛生な環境により病気で苦しむ人がいるのは戦時中、遠い昔のことだと思っていたからだ。同じ人間なのに、生まれた環境が違うだけであんなにも苦しい思いをしたり、若くして命を落としてしまったりするのは間違っていると思った。「国連職員」になって、国際問題を解決したい、世界に平和を取り戻したい、苦しんでいる人を助けたいと、素直に私は思った。

少し前、1冊の伝記を読み終えた。「フローレンス・ナイチンゲール」だった。裕福な家に育った彼女は、働かなくてもよい身分であったにもかかわらず、苦しんでいる人を救うために、当時不潔で汚らしいとされていた看護師の仕事に就いた。そして、その生涯を病気やけがに苦しむ人に捧げた。私は、目の前で苦しむ人に自分の生涯を捧げた彼女の生き方に感動し、私自身もそうありたいと本気で思った。しかし、最近になって「本当に自分が国連職員になれるだろうか」と不安になった。

国連職員になるためには、三つの条件をクリアしなければならないからだ。第1に「専門性」、第2に「業務経験」、第3に「語学力」である。国際社会に貢献できる専門性とその専門性を生かした業務経験が必要だ。そして、海外での活動を支えるコミュニケーション能力、語学力も当然必要となる。私は、初対面の人と話すのが苦手だ。話しかけてもらうまで待つことが多い。こんな私が自分の知らない国に行って、コミュニケーションがとれるだろうか。自分にこの三つを身に付けることができるだろうか。

私の暮らすこの日本は治安もよく、衛生環境もよい。日本語で不自由なくコミュニケーションもとれる。しかし、私が将来働く国の治安はどうだろうか、衛生環境はどうだろうか、私の語学力でコミュニケーションはとれるだろうか。そう思うと不安でいっぱいになる。

貧困や病に苦しむ人を救いたい、けれども。自分にそれができるのか、自分の中で葛藤していた。

そんなとき、使わなくなったランドセルをアフガニスタンの子どもたちに寄

付する活動があることを知った。アフガニスタンではランドセルなどなく、教科書は手に持ったり、袋に入れたりして学校に通っている。ランドセルは、背負うと両手が使えて、膝の上に置けば机代わりにもなって便利だ。私は、その活動に参加したいと思った。今の私には、アフガニスタンの子どもたちにランドセルを寄付することができる。活動を紹介した冊子には、ランドセルを配られたときの子どもたちのうれしさが書かれていた。私もランドセルを買ってもらったときのうれしさを思い出した。宝石のように輝いて見えた赤いランドセルは私の気持ちを明るくさせた。このランドセルによってアフガニスタンの子どもたちが学校に行くことが楽しみとなり、学びが深められたなら、とてもうれしいと思った。

実際にランドセルを寄付するときは、できるだけきれいな状態で手に取ってもらえるようにタオルで丁寧に拭いた。そのとき、私自身がうれしい気持ちになった。人のために何かをすることは相手ばかりでなく、自分自身もうれしくなり幸せな気持ちになれることをそのとき改めて実感できた。

国連職員になれる自信は、やはり今もない。しかし、苦しんでいる人々を救いたい、もうこれ以上そういう人を出したくはないという思いは強くある。だから、今はその思いを大切に国連職員という夢に向かって努力していこうと思う。

専門性を身に付けること、業務経験を積むこと、コミュニケーション能力・語学力を身に付けることは、きっと他のことにも役に立つだろうし、そのための努力も決して無駄にはならないと思う。

もし迷ったときは立ち止まり、小学校6年生のときに目にした貧困に苦しむ人々を思い返したい。そして、そのときの自分にできること、これからすべきことをしっかりと考えて進んでいきたい。そこからまた自分の進むべき道が開けると思うから。